

肌で見て感じたベトナム

1 年 1 組 圖子 維秀

この夏、僕は直視する事のできないくらい残虐な写真の前で、息を殺して立ち竦んでいた。ベトナム・ホーチミン市の「戦争証跡博物館」に陳列された数々の戦闘機や爆弾。初めて目にしたその鉄の塊たちは、不気味なまでに静かに平然とした表情で、入り口の広場に並んでいた。「この地震爆弾は6.8トンで破壊力は直径百メートル。」

現地のガイドさんが流暢な日本語で説明してくれた。しかし、平和な時代に生きている僕にとっては、どんなに想像力を駆使しても非現実的な内容には、ついていくことさえ出来ないのだ。それでも、目の前の、あまりに残虐かつ衝撃的な光景を視覚的にみせつけられては、どこにも逃げる事の出来ない戦火に焼かれ、恐怖に慄くベトナム人達の苦しみが、もう他人事ではなくなっていくのであった。そして、それらの見聞を徹底的に私に伝えてくれたのが、開高健の「ベトナム戦記」であった。1964年末から65年にかけて、ベトナムの戦場からレポートした作品である。アメリカの従軍記者として、いつでも自分の意思で戦争から撤去できる立場だったとは言え、彼の生々しい体験のレポートは、当時の遠く離れた日本人に大きなショックを与えたに違いない。「突然銃声が響き、恐怖の銃撃戦が始まる。竹細工の様な骨の上にセロファンより薄い皮膚を張って、よちよち歩きまわる豆腐の様な頭蓋骨の彼が、悲惨な司令部となった。あり塚の中で感じた恐怖は、想像を絶するものである。」胸が得体の知れない大きなもので押し潰されそうな圧迫感に私は襲われた。目の前で、肩を抜かれ、腿に穴があき、鼻が削られ、尻をそがれ、顎を砕かれた負傷兵が、誰一人として呻く事もなく、悶える事もなく、ひっそりと死んで逝ったという。人の命の重さ・尊さを盛んに主張する世の中で、こんな事が許されるのか。しかし、悲しい事に、これが「戦争」というものなのだ。当時のサイゴン中央市場は、毎日の様にお坊さんが戦争に抗議するためガソリン自殺や割腹自殺をする場所であった。この本では、地雷と手榴弾運びの一人の少年の公開処刑の様子が書かれている。十人のベトナム兵が一人の少年を撃つ。黒く開いた小さな穴から鮮血が流れ出す。うなだれた首をゆっくり右、左に振る少年のこめかみに、将校がとどめの一発を打ち込む。この少年が逮捕されていなければ、彼の運んだ兵器で沢山の人が命を落としていたに違いない。将校の命令を実行するかしないかで、彼は<英雄>にもなれば<殺人鬼>にもなる。それが「戦争だ。」と作者は言い切る。<自然>のいたずらで地上に出現、大脳の退化した二足獣なのだという感情が、彼を絶望の淵に立たせていた。こんな悲惨な出来事のあった同じ場所で平和にどっぷり浸かって育った私は、何を考え事も無く買い物を楽しんできた。今思うと、とても複雑な心境である。

今日も世界のあちこちで内乱や紛争は起きている。戦争を知らない私達が、戦争や平和について語ることは頗る大変な事である。しかし、平和とは何か、そのために私達は何を

なすべきか、繰り返し考えることは出来るはずである。靖国神社や教科書問題など、「分からない」難しいといって逃げ出すのではなく、正しい知識を持ち、偏見を知り、人間として健全な判断力と良識ある行動を身に付けていく努力を怠ってはいけない。それが平和を考える上で、とても大切な事だと思うからである。生死を懸けてレポートした、開高健氏の熱き情熱と勇気には、只々おどろくばかりである。